

自然誌 だり 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 100号

2014年 6月

昨冬から春にかけての珍しい鳥3種ーヤドリギツグミ、バライロムクドリ、オジロビタキ



写真1 ヤドリギツグミ. 2014年1月4日, 紀宝町 2 バライロムクドリ. 2014年3月31日, 熊野市有馬町
3 オジロビタキ. 2014年1月18日, 津市新家町 4 飛翔するオジロビタキ. 2014年1月20日, 津市新家町
5 ハリオシギ. 2014年4月17日, 御浜町志原 (中井節二・撮影) 6 ミゾゴイ. 2014年4月19日, 熊野市有馬町
(中井節二・撮影)

鳥は、分布と生息状況から9区分され(日本鳥類目録改訂第七版)、日本で繁殖する種は5区分、渡来する種は4区分で記されている。後者の4区分はWV(winter visitor:冬鳥)、PV(passage visitor:旅鳥/定期的)、IV(irregular visitor:旅鳥/不定期)、AV(accidental visitor:迷鳥)で表され、ヤドリギツグミとバライロムクドリの2種はAV、オジロビタキはIVとされている。

ヤドリギツグミ、バライロムクドリの2種は県内初記録。第一発見者の中井節二さんは本会の会員で、紀州に渡来する鳥類を長年観察され、熊野市在住の地の利を活かして貴重なデーターを蓄積されている。今回の観察も中井さんのご厚意・案内により行うことができ、発表についても快諾していただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

さて、ヤドリギツグミが越冬している紀宝町の田圃へ案内してもらったのは今年の1月4日。日本でも5例目の鳥を神妙に撮影。刈田の土に紛れる背の灰褐色と白い胸腹の黒斑が特徴である(写真1)。昨年12月中旬から長期滞在し、最終確認日は4月8日。なお、この個体の写真は図鑑に採用され、出版されている(決定版日本の野鳥650 平凡社 H26.1.31発行)。

3月末に『日の入り30分前にしか来ない鳥を見に来ますか?バライロムクドリですが、見られる保証はないですよ』と、これも中井さんから連絡をもらい、翌日、熊野市有馬町に出かけた。夕方ねぐらの近くにムクドリは数十羽の群れであちこちからやって来る。その度に目を凝らしていると陽が山の端に沈む10分ほど前にバライロムクドリが現れ、しばらく羽繕いなどしてムクドリの群れに混じって塹へ飛び去った(写真2)。ムクドリより少し小さく、腹や嘴、脚が淡いピンク(光の当たり方で淡褐色や汚白色に見える)、名からイメージするほどの体色ではなかったが、初めて見る鳥の姿は強い印象を残した。小笠原や琉球列島などでの観察例を除いて本州では5例目となる。最終確認日は5月1日。

オジロビタキが確認されている近府県は、日本鳥類目録(改訂第七版)によると愛知、岐阜、滋賀、奈良、和歌山で、三重県での観察データーはないと思われる。図鑑を見ると、数少ない旅鳥、毎年日本のどこかで観察され、日本海側での目撃が多いなどと説明されている。

1月中旬に友人から津市郊外にオジロビタキがいると連絡があり、その日の夕方、新家町地内で確認することができた(写真3)。この時期に津市偕楽公園と明和町の二ヶ所でもオジロビタキが観察されていて、約30kmの間に3羽が越冬していたことになる。津市新家町は雲出川に沿って農地が広がり、段丘沿いに雲出井用水があり、用水路に沿って竹林や雑木林が続いている。近くには住宅街や農家の集落があり、ウォーキングや犬の散歩で毎日人が行き交う農道脇の林でオジロビタキは越冬していた。偕楽公園の個体のようにカメラマンに餌付けされることもなく、この個体は静かに見守られていた。餌の捕り方は興味深く、天候が良い日は竹林や雑木林の林冠でフライングキャッチを盛んに行い(写真4)、夕暮れや天候が良くないときは用水路沿いの田や畦で餌を探していた。ヒタキ類に共通する丸い目は可愛く、人への警戒心が弱くて人懐っこい。最終確認日は1月31日。

新家町の個体が発見されたのは幸運な条件があった。散歩のコースにこの鳥が出ていたこと、前日に偕楽公園の個体を観察していたので識別が容易であったこと、この二つがなければ気付かなかったと友人は語る。小さくて地味な小鳥なので見つけにくく、人目に触れなかった個体もいたにちがいない。この春、県内で目撃された3個体はすべて幼鳥だった。幼鳥の群れが渡来して分散し、1羽ずつで越冬していたのだろう。三重はいい所だったと、また来て欲しいものだ。

追記

県内で記録の少ない以下の2種についても中井さんから情報提供をしていただいたので記録しておく。

ハリオシギ(写真5, 2014年4月17日, 御浜町志原)

ミゾゴイ(写真6, 2014年4月19日~21日, 熊野市有馬町)

今堀聖史(いまほり きよふみ):津市久居小野辺町 1454-30

蘚苔・地衣ノート（１） 鈴鹿山脈多志田峡

葛 山 博 次

多志田峡一帯の自然は、旧治田村（現いなべ市北勢町）の財産区として、そこに住む住民は永年にわたり薪炭材をはじめ多くの山の資源に依存して暮らしを守り、命をつないできた。その恵みは計り知れない。そうした人と自然のかかわりの歴史に満ちた峡谷一帯である。

化石燃料の普及により、村人たちは山に入ることが少なくなり、しだいに山城は荒廃した。加えて、鉱山業者による採掘や近年の異常気象による土石流の多発などが重なり、峡谷一帯の自然環境はすっかり変容し、70年前にシバ刈りに入った当時の面影はまったくない。孫福正先生が1934年にイナベアザミ *Cirsium magofukui* を発見された地域も土石流で埋まり、イヌワシの雄飛を寝ころんで眺めた長持石も埋まってしまい、イヌワシの営巣があった岩峰も今はみる影もない。

1965年12月27日、名古屋大学の高木典雄先生にご指導いただいたの多志田峡でのコケ教室は盛会であった。その日の記録によると、石灰岩地帯特有のハリイシバイゴケ (No.100) *Molendoa sendtneriana*, タチヒラゴケ (No.107) *Homaliadelphus targionianus*, ホソヒラゴケ (No.108) *Neckera gonghiana*, ホソホウオウゴケ (No.138) *Fissidens granadifrons* などや、オオギボウシゴケモドキ (No.132) *Anomodon giraldii*, リボンゴケ (No.112) *Neckeropsis nitidula*, ニスビキカヤゴケ (No.97) *Porella vrenicosa*, マルバハネゴケ (No.95) *Plagiochilao valifolia* などに加えて、硫化水素泉の湧く多志田不動尊ではイワマセンボンゴケ (No.101) *Scopelophila ligulata* の生育が確認された。この蘚類は Cu などの鉱物を含む岩上を好み、黄緑色で褐色がかかった群落をつくる特別なコケであることが知られている。このコケに出会ったことが大収穫であったと書きとめてある。今もその標本とともに忘れることのできない一日となった。しかしながら、この貴重なコケの生育地である鉱泉も土砂に埋まり、その後いく度か訪ね、丹念に探してもその姿はまったくない。

2013年4月21日、久しぶりに多志田峡を散策した。最深部から県境稜線にとりつき、孫太尾根に入り再び多志田峡に戻るコースをたどった。子どものころ何度となく入ったコースである。当時から目印としてきたブナの大木は健在であったが、カツラはいくたびとなく萌芽更新したあとがみられた。孫太尾根は北鈴鹿の山なみの中で、最近までこの地特有の植物が残されていた地域であるが、近年の山草ブームで山道や生育地は踏み荒らされ、加えて植生の遷移も進行して、かつてのスプリング・エフェメラルの花園はさみしく影をひそめている。

峡谷に下り、改めて孫太尾根北斜面を眺めて驚いた。採石や土石流により山肌はむきだしになり(写真1)、わずかな伏流水を介してその岩肌を包み込むようにミズシダゴケ (No.35, 325) *Cratoneuron filicinum* が大群落をつくっている (写真2)。繁殖しすぎてはげ落ち堆積したミズシダゴケは山積み



写真1 多志田峡から孫太尾根を望む。手前は土石が堆積した多志田峡 (2013.4.21)



写真2 写真1の中央岩場で大群落をつくるミズシダゴケ (2013.4.21)



写真3 岸壁からずりおちたミズシダゴケに埋まっていたイブキクロイワマイ (2013.4.21)



写真4 石灰岩の隙間に群落をつくる好石灰性のハリイシバイゴケ (2013.4.21)



写真5 石灰岩壁に育つ好石灰性のシダ植物イチョウシダ (2013.4.21)



写真6 石灰岩壁にオオギボウシゴケモドキを介して生育を続けるシダ植物のピロードシダ (2013.4.21)

となっていた。そこにはイブキクロイワマイマイの無惨な屍もあった(写真3)。山肌の岩壁をたどると石灰をかむったような姿のハリイシバイゴケが小さなマットを点々とひろげ(写真4)、好石灰岩性のイチョウシダ(写真5)、オオギボウシゴケモドキを介してピロードシダ(写真6)がわずかながらへばりつくようにして生育するのが確認できた。

かつては落葉性の低木林であるコクサギ、ヤマブキ、アブラチャン、イブキシモツケなどに、常緑のツゲやヤブツバキを混じえた植生だった北斜面は上記のように大きく変容している。この峡谷の自然が年を重ねながらどう変化し、植物たちはどのように変遷するのか、半世紀前の植生の復元は望むべくもないのか、考えながら下山する。

不動尊周辺のスギの樹幹にはカワラゴケ *Cococarpia erythroxyli* やキウメゴケ *Flavoparmelia caperata* などの地衣類が健在であることに気づき一息ついた。

なお、() 内のNo.は所蔵標本の番号である。

(かつらやま ひろし：いなべ市北勢町別名659-5)

旧三重県立博物館に植えられているハマナツメのルーツ

山 本 和 彦

ハマナツメは日本南部の海岸に生育する稀な落葉低木で、ハマナツメが分布する県や国のレッドリストでは絶滅危惧種に指定されています。ハマナツメのことは、これまでも本誌で何回か紹介してきましたが、今回は旧三重県立博物館の敷地に植えられているハマナツメの話題です。この敷地にはトキワマンサクをはじめ、いくつかの貴重な樹木類が植えられています。その中で道路に面した北側の一角に一株のハマナツメがあります。野生のハマナツメが生育している環境とはまったくかけ離れた場所ですが、ハマナツメは元気そうで、成長も良好なようです。

ところで、このハマナツメはどこから移植されたのでしょうか。三重県内でハマナツメが自生しているのは熊野市から南伊勢町にかけての限られた海辺で、伊勢湾沿岸部には分布していません。以前、旧博物館前のハマナツメは紀北町海山区の船越池産だということを、船越在住の脇貞憲さんと伊藤正義さんからお聞きました。その移植の経緯はつぎのとおりです。

1959年に「伊勢志摩・吉野熊野両国立公園地域拡張調書」という報告書が出版されています。自然分野では三重県自然科学研究会に所属する30余名の専門家が調査・執筆し、地形地質や動植物を含む総合的な報告書となっています。これだけ詳細な自然環境調査は、紀伊半島東部～南部の地域ではこれが初めてだったのではないのでしょうか。この調査は1958年から1959年にかけて行われ、当時島勝浦の桂城中学校教諭であった伊藤正義さんも調査に協力しています。この調査中に、当時博物館職員の角

田保さん（故人）が、船越池に生育するハマナツメは貴重な植物なので博物館で屋外展示したい旨を伊藤さんに伝え、1株掘り取りトラックで運んでいったようです。移植されたのが1959年としても、2014年現在で55年は経過しています。最近では歩道にかかる大きな幹は伐採されるため貧相な樹形となっていますが、かつては船越池のハマナツメにも劣らない樹形をしていました。

この移植ハマナツメからハマナツメの性質をいくつか知ることができました。一つは繁殖の方法です。植物の繁殖方法の中には、自殖と他殖がみられます。前者は、自分とは違う個体からの花粉を受け入れ（他家受粉）種子を作る方法、後者は自分の個体上の花粉で受粉（自家受粉）する方法です。移植ハマナツメは毎年たくさんの果実を着け、株元や周辺から実生や幼木が見つかります。近くには他のハマナツメが見られないことから、自殖でも繁殖することができる性質をもっているようです。

ハマナツメは、果実が海流に乗り分布を広げる海流散布植物であると言われています。1個の果実が浜辺にたどり着き、運良く成長できたなら、後は自殖により種子を生産し、その後集団をつくることもできます。移植ハマナツメから示唆された、自殖も可能という性質は、海流散布植物であるハマナツメの分布や生活史を解明する上で重要な意味を持っていると思われます。

また、観察会などで「ハマナツメは海岸近くの塩湿地に生える樹木で・・・」と説明すると、潮風や潮水などに浸かるような湿地でないとハマナツメは生育できないのですかという質問を受けたりします。その時には、博物館前のハマナツメが元気に育っていることを例に出して、ハマナツメも他の植物が育つような普通の立地でもよく育つことを話します。潮水や湿地が好きなのではなく、そのような劣悪な環境に耐える性質を持っているが、他種との競争に弱いので、普通の植物が入れないような環境を選んで生活していると説明します。このことも移植ハマナツメから知った性質の一つです。

もう一つ知ったことは、ハマナツメの寿命のことで、ハマナツメは根元から10数本の幹を四方に出し、独特な樹形をしています。一つ一つの幹は比較的短命で、普通30年から40年で枯れてしまいます。幹が枯れる頃、株元から新しい萌芽幹が伸び出し、古い幹と世代交代し、更新（萌芽更新といいます）して行きます。ですから幹の寿命とハマナツメの一株の寿命は違ってきます。一株の寿命は、一体どのくらいなのかよくわかりません。移植ハマナツメから分かることは、今のところ少なくとも55年は萌芽更新をしながら生存しているということです。

2014年4月から博物館は移転し、新しい博物館として動き出しています。それに伴い旧敷地内の樹木類も移植されるものと思っていましたが、5月現在でも取り残されたままです。今後移植の予定はないのでしょうか。あるいは現在の場所で展示物として保存されて行くのでしょうか。とくにハマナツメやマメナシは三重県指定希少野生動植物種に指定され、伐採する際には届出が必要となっている植物です。移植が無理なら、今の場所で保存して行く方向を考えてもらうことを望みます。



写真1 旧博物館前に植栽されているハマナツメ、2004年10月17日撮影



写真2 旧博物館前のハマナツメの株元付近で見られたハマナツメの幼木、2004年10月10日撮影

〈やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40〉

外国産コマツナギにフタスジヒメハマキが

篠 木 善 重

6年前の2008年のこと。国道306号線を走行中、亀山市管内町地内の道路法面両側に赤い花をつけた樹木が列生しているのに気が付いた(写真1, 2)。車を止めて観察してみると、一見、花といい、葉



写真1 国道306号線沿いに植えられているコマツナギの外来種 亀山市管内町



写真2 コマツナギの外来種。亀山市管内町2008.5.26



写真3 コマツナギ外来種の葉上に止まるフタスジヒメハマキ 亀山市管内町2013.6.1



写真4 さやの中に入っている蛹。亀山市管内町2014.5.6

身長をはるかに超えるコマツナギなんてこれまで出会ったことはなかった。この時、この植物群落に小さな蛾が生息していることにも気が付いた。以来、毎年彼らに会いに出かけている。在来コマツナギに近似のこの植物について、あらためて調べてみた。

太田(2010)は、インド原産のタイワンコマツナギ*Indigofera tinctoria* L. として、1996年以降に名張市、伊賀市、いなべ市から記録し、新設道路ののり面や公園などの造成地に生える大型で直立する木本で、中国から輸入された種子に由来すると憶測されるという。

植村ほか(2010)は、キダチコマツナギ*Indigofera* sp. とし、本種をトウコマツナギ(*I. bungeana* Walpers)に当てたり、コマツナギ(*I. pseudotinctoria* Matsum.)と同種にする見解などがあり、種の扱いについては再検討を要するとしている。米倉(2012)は、*Indigofera bungeana* Walp. var. *bungeana* トウコマツナギ(キダチコマツナギ)のほかに*I. tinctoria* L. タイワンコマツナギも別種としてあげている。在来コマツナギとサイズが異なる中国産コマツナギが同種か否か、その疑問を遺伝子分析で解き明かした阿部ほか(2004)は、中国産と日本産では遺伝的に別種であることが示唆されたとしている。

ここまでの調査で明らかとなってきたことは、在来コマツナギとは別種の外国産(おそらく中国産)コマツナギが三重県内に広く帰化していることである。しかし残念ながら、その種名を特定することはできなかったし、県内に分布しているのは1種だけなのかということも未解決である。

小さな蛾については、ハマキガ科ヒメハマキガ亜科のフタスジヒメハマキ*Grapholita pallifrontana* Lienig & Zeller, 1846で(写真3)、那須ほか(2013)によると日本では本州と四国に、また中国、ロシアなどにも分布し、コマツナギが寄主植物として知られている。筆者は、亀山市と津市(市道法面に生える外国産コマツナギにて)で本種成虫を採集しているので報告する。また、2014年5月6日にはさやの中にある蛹(体長7.5mm)を確認した(写真4)。この時、蛹の入っていないさやの中には種子が入っていたが、蛹がいたさやの中には種子が無かったので、幼虫が種子を食べていたことは容易に想像できる。種子を食べつくした後に、そのさやの中で蛹化したのであろう。なお、この蛹は5月18日に無事羽化した。また、葉に食痕は見られないので、幼虫は葉を食べないのであろう。亀山市の生息地では7年間毎年、本種の生息を確認している。16頭の標本は三重県総合博物館に寄贈する予定である。

フタスジヒメハマキ採集データ

亀山市菅内町，25－V．2010，3頭，1－VI．2013，10頭，6－V．2014，2頭；津市一身田町豊野，6－VI．2013，1頭，筆者採集．

謝辞

文献を恵与いただいた市川正人氏，三重県総合博物館の大島康宏学芸員，フタスジヒメハマキを同定していただいた間野隆裕氏の各氏に厚くお礼申し上げる．

文献

阿部智明ら（2004）中国産コマツナギを自生のコマツナギとして扱ってよいか．日本緑化工学会誌，30，（1）：344-347，日本緑化工学会．

那須義次ら編（2013）日本産蛾類標準図鑑Ⅳ．552pp．学研教育出版，東京．

太田久次（2010）新版三重県帰化植物誌：316pp，ムツミ企画，津．

植村修二ら（2010）日本帰化植物写真図鑑第2巻．579pp．全国農村教育協会，東京．

米倉浩司（2012）日本維管束植物目録．379pp．北隆館，東京．

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

三重県初記録のステゴビルとシコクフクジュソウ発見の経緯

市 川 正 人

鈴鹿山系の藤原岳で生育が確認され，最近，三重県の植物相の仲間入りをしたステゴビルとシコクフクジュソウについて，その特徴と発見の経緯を紹介する．なお両種は，環境省が絶滅危惧Ⅱ類（VU）にランクする希少な植物である．

ステゴビルは本州，四国に分布しているが，生育は局所的である．花は，園芸品種のヒヤシンスを小さくしたような形で，約20cmの茎の先に数個を着ける（写真1，2）．色は白か淡紫色であるが，当地では両方の花色の個体が混生している．葉は数枚を根生し線形で艶があるため，花がなくとも類似種との識別は可能である．当地では，葉は春に出て，花の時期までには枯れる．

さて，三重県で初記録となるステゴビル発見は，2011年9月下旬，いなべ市の出口幸雄氏と津市の平井清氏によりもたらされた．筆者は，両氏が撮影された発見時の写真をいなべ市の清水実氏から受けとり県内で未確認のステゴビルと同定し，直ぐに単独で生育地へ行きステゴビルであることを確認した．なお実際には，現地で直ぐには見つけられず，あきらめて昼食後に下山しようと岩に腰を下ろした直後，1m先の石のわきに花を見つけ，いたく感動したことを記憶している．ちなみに，出口幸雄氏は鋭い観察眼を備え，鈴鹿山系北部の道なき道を隅々まで知り尽くした方，平井清氏は動画を中心に撮影し，DVDに編集をする人物，清水実氏は藤原岳をこよなく愛し，その保護を主張し運動するいなべ市議会議員である．

次にシコクフクジュソウである（写真3，4）．フクジュソウ



写真1 ステゴビル



写真2 ステゴビルの花



写真3 シコクフクジュソウの花



写真4 シコクフクジュソウの集合果（中心に果托がある）

類は現在4分類群とされ、フクジュソウ（エダウチフクジュソウ）、キタミフクジュソウ、ミチノクフクジュソウ、シコクフクジュソウに分けられている。これらのうちフクジュソウは藤原岳の融雪とともに咲き上がる早春植物として良く知られているが、これにシコクフクジュソウが追加されたことになる。

前出の出口幸雄氏と山野草木愛好家で写真撮影に熱心な桑名市の小沢俊元氏は、10年も前からフクジュソウとは一風変わった1本立ちのフクジュソウが藤原岳に生育していることに着目していた。2013年3月上旬に、シコクフクジュソウの命名者の1人である元北海道教育大学の西川恒彦氏の同定によりシコクフクジュソウと同定され、やっと日の目を見たのである。前出の清水実氏から筆者へ写真と標本が送られてきたが同定は難しく、フクジュソウ研究者の西川恒彦氏を紹介し、この結果を得ることができたのである。

西川氏から清水氏に送られた私信にはシコクフクジュソウとフクジュソウの特徴の相違点が記されている。その中で「シコクフクジュソウは果托に毛がないかフクジュソウに比べて明らかに短い」については確認し得心したのであるが、一方で「茎についてはフクジュソウが中実、シコクフクジュソウは中空であるが、調べる茎の位置によって不明になること、ハモグリバエの食害をうけるため同定要素にはなりにくい」旨を記している。しかし、少なくとも藤原岳のフクジュソウは茎のどの部分も中空であり、むしろ中空であるシコクフクジュソウの茎の方が穴は細い。両者の染色体数は明らかに異なり同定に問題はないと思われるが、この茎の特徴はどのように理解したらよいのか、疑問が残る結果となった。

文中に登場した4人に加え、両種の初記録にかかわり、いつも行動を共にしているもうお一方が、NHKテレビ番組地方版「マイビデオ」に試料提供している自然愛好家の新貝里美氏（菰野町）である。三重県内初記録2植物の発見は、日ごろから山を愛し植物を見る目を養っているこれらの方々の連携があってこそその成果である。

藤原岳は、地理的に東西南北の気候に影響され、また石灰岩地でもあることから、これからも珍しい植物の出現が期待できる所であるので、後世に残したい山であると思う。

〈いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5, 606〉

事務局から

○紀伊半島3県フィールドワーク交流会

今年では三重県での開催です。同封の案内のように実施しますので、皆様ぜひご参加下さい。

○会報の原稿募集

会報「自然誌だより夏号」は9月発行予定です。観察記録や会への意見・要望、自然保護活動などについて、ふるってご投稿ください。

○2014年会費未納の方は至急お振り込み下さい。退会される方はご一報を!!

編集後記

100号の区切り、原稿集めに四苦八苦状態、さらに、新博物館も開館したので本誌休刊の提案も考えましたが、同館が地域自然誌を研究対象にするのかわからない状況ですので、もう少し継続してみます(善)。

自然誌だより100号

発行日 2014年6月1日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp